九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Affective Glitch of the Empty Stage: Post-Subjective Creative Processes of SINGULAR_GLITCH in Posthuman Media Art

イ, スンギュ

https://hdl.handle.net/2324/7443454

出版情報：Kyushu University, 2025, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

（様式６－２）

氏　　名	YI　SEUNGGYU
論　文　名	Affective Glitch of the Empty Stage: Post-Subjective Creative Processes of SINGULAR_GLITCH in Posthuman Media Art （ポストヒューマン・メディアアートにおける《SINGULAR_GLITCH》のポスト主体的創造過程と空舞台のアフェクティブ・グリッチ）
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　西田　紘子 副　査　　九州大学　　教授　　知足　美加子 副　査　　九州大学　　准教授　長津　結一郎 副　査　　立命館大学　　研究員　ゼミソン　ダリル

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本研究の狙いは、「SINGULAR_GLITCH」と名づけた理論的枠組みを開発し、ポストヒューマン・メディアアートにおける脱主観的な創作過程を解明することである。具体的には、送信者、受信者、パフォーマーを体系的に除去した「空舞台」の設定において、どのように分散されたエージェンシーや情動的な出来事が立ち現れるかを明らかにすること、グリッチ美学と再帰的なフィードバックが、従来の作者概念や美的体験をいかに再編成しうるかを理論すること、人間的な創造的主体性を排除した技術的構成の中で、どのような新しい美的・存在論的条件が生じるのかという根本的な問いに答えること、実際にプロトタイプを設計・分析し、観客調査を通じてその知見を整合させることを目的とする。

第 1 章では、伝統的な人間中心の創造性モデルから、テクノロジーが能動的・生成的な役割を果たす脱主観的なプロセスへの移行が論じられる。ここでアフェクト（情動）は、個人の意識的な感情に捕らわれる前の、身体やシステムを循環する「前個人的な強度」として定義される。また、作者や観客の不在下でも出来事が展開する「空舞台」の概念が提示され、創造的なエージェンシーが人間と非人間のネットワークに分散していることが示唆される。

第 2 章は、本研究の理論的基盤を詳述している。アフェクト理論に基づき、芸術体験が意味の解釈ではなく強度の変動として捉え直され、グリッチをシステムの連続性を断ち切ってあらたな可能性を開く出来事として定義される。創造的行為能力については、人間、コード、ハードウェアの相互作用から生じる「分散された行為能力」として概念化される。これらの西洋哲学的枠組みは、韓国の伝統美学における「余白」や「素朴」といった、不在や不完全さを肯定する視点と対照され、それらが「SINGULAR_GLITCH」という、自己生成的な情動フィードバックループのモデルへと統合されている。

第 3 章では、「SINGULAR_GLITCH」が構造的・哲学的に分析されている。システムに入力された匿名メッセージは、意味内容ではなく非カテゴリー的な 7 次元の情動ベクトルに変換され、これが映像や音響を変調させる駆動力となる。ここでグリッチは、システムの軌道を予測不能な形で変容させる「出来事」として機能し、創造的な新しさを生み出すエンジンとなる。このプロセスにおける作者は、特定の人間ではなく、アルゴリズム、ハードウェア、環境からなる集合体全体であり、行為能力はネットワーク全体に分散される。観客調査では、参加者がシステムに対して独自の自律

性や創造性を感じとったことが示されている。

第 4 章は、研究全体の知見を総括している。「SINGULAR_GLITCH」は、人間と機械が協働して予測不能な成果を生み出すポスト主体的な創造プロセスの具体的な事例として提示されている。結論として、情動のループが入力を力へと変換し、グリッチが断絶を通じて新しさを生成し、行為能力が関係性の中で創発することが示された。ただし、創造的な変容自体は非人間的なプロセスによって生じうるものの、そこに芸術的な価値や意味を見出すという行為は、依然として人間の認識の枠組みに根ざしていることも付記されている。

本研究成果は、独自の理論的枠組みを開発し、ポストヒューマン・メディアアートにおける脱主観的な創作過程を美学的に体系づけることであらたな知見を得たものであり、価値ある業績と認められる。

最終試験

この論文について、論文調査委員会は、令和８年２月 16 日 10 時からオンラインで YI SEUNGGYU 氏及び論文調査委員全員の出席により、公開による論文の調査及び最終試験を実施した。

論文内容について、YI SEUNGGYU 氏は論文調査委員の質問に相応な回答を行ったので、論文調査委員会は最終試験を合格と認定した。

以上のことから、論文調査委員会は、YI SEUNGGYU 氏が博士（芸術工学）の学位に値すると認める。